

(実業団女子駅伝、当社女子駅伝部は残念ながら第3位であった。11月3日)

先日の国連総会における日本代表と北朝鮮代表の拉致問題に関する激しい応酬を聞いて、やや疑問を感じた。北朝鮮代表が“日本も戦前、朝鮮人を数百万（発言の正確な数は失念）拉致したではないか”と非難し、これに対し、“その数は誤りである”とさも拉致は事実だが数の算定が誤っていると言わんばかりの反論を日本代表がした。可笑しい、数の問題ではあるまい。

少なくとも日本が在朝鮮半島の朝鮮人を徴用・徴兵したのは、昭和19年9月からである。在日朝鮮人団体が実施した、在日朝鮮人で1910年から1945年の間に日本に渡航して来た者に対するアンケートによると徴兵・徴用は13.3%である。自由募集期間の期間も含まれているので、19年9月からの僅か4ヶ月の間に徴兵・徴用された者は極めて少ない筈だ。まして拉致などと言う国家主権を侵害しての違法行為はしていない。

余りにも、馬鹿げているので反論などすることも必要ないと思っているのだろうか。言われ続け、反論しないと他の国はどう見るだろうか。認めていると思われてしまいかねない。それが怖い。

【閑話休題】



都心に勤務し、土日もバタバタしている毎日を過ごしていると、季節感が薄れてしまう。せめて一時でも季節を感じたくて昼休みに、皇居外苑、日比谷公園、二の丸庭園などを散策するのだが、今年は殊の外秋の訪れが遅いようで、何処も紅葉、残念ながら今だしである。11月2日、日比谷公園で東京都観光菊花大会が開催されていることを発見し、誘われるままに、足を運んだ。

菊の香りに、忘れていた秋を思い出し、重陽の節句なのだと思い知った次第である。とは言え、既に時節は11月、旧暦の九月九日は、今年（太陽暦）は、十月十一日であり、既に過ぎ去っていた次第である。どうも暦と季節感のずれが大きすぎる。何とかならないものだろうか。

節句は、年中行事を構成する日である。年に何回かある重要な折りめのことで、基本的には神祭をする日である。迎えた神に神饌を供して侍座し、あとで神人共食することによってその霊力を身につけようとするもので、氏神祭や正月、盆も重要な節供といえよう。五節供(五節句)は中国から伝えられ、江戸時代に民間に普及したものである。

重陽の節句は、本来であれば、暦日上の九月九日に実施すべきであるが、余りにも季節との乖離があるので、廃（すた）れてしまったのであろう。

さて、東京都観光菊花大会は、大正3年から開催され、質量共に我が国屈指と評されている。展示種目は、大菊盆養（厚物、管物）、大菊切花、福助、だるま、江戸菊、盆栽、懸崖、実用花などである。夫々を簡単に説明しよう。

●大菊盆養：3本仕立ての鉢植えの大菊（厚物と管物）

厚物：丸みを持って平弁が幾重にも重なり球状に盛り上がり咲く花

管物：花の下部から管のような長い走り弁が放射状に延びて咲く花

- 大菊切花：大菊一本をピンに挿したもの
- 福助：大菊を5号鉢で40cm以下の高さに一輪咲かしたもの
- だるま：大菊を7号鉢で60cm以下で3本仕立てにしたもの
- 江戸菊：江戸時代からの中輪系の菊「狂」が特徴
- 盆栽：小菊を盆栽つくりにしたもの
- 懸崖：小を根より低く垂れ下がるように作ったもの
- 千輪咲：1本の菊から3～400の大菊を咲かせたもの
- 実用花：生花等に使う菊花

丹精込めて育てられた色鮮やかな菊約2600点が出品される。
一見の価値がある。11月の23日まで、1000から1530開催されている。

一文字と言う菊がある。大菊の中で、唯一の一重咲きであり、別名「御紋章菊」と呼ばれている菊である。

菊の御紋章。皇室の正式な菊紋は16弁。第82代後鳥羽天皇が菊の花を好まれ、その文様を天皇の輿や車の飾り、刀剣等に刻み込んだことから公家たちが菊の紋章の使用を控えたことが、その起源といわれている。法的に確定したのは、1926（大正15）年1月21日公布、同年11月1日に施行された皇室儀制令第12条（「天皇太皇太后皇太后皇后皇太子皇太子妃皇太孫皇太孫妃ノ紋章ハ16葉八重菊形トシ左ノ様式ニ依ル」）からである。

菊の御紋章は日本の軍艦の艦首に付けられていた。因みに軍艦ではない駆逐艦や潜水艦には付けられていない。

平安時代初期に伝来した菊を愛でながら菊酒を飲んだ宮中行事「観菊の宴」は、邪気を避け、寒季に向けての無病息災を願ったものである。それが、武士、庶民の間にも広がり、菊（花）酒を飲み、栗飯を食べて重陽の節句を楽しむようになった。菊酒とは、菊のお花を浮かべたお酒の事である。山形に赴任した時に食用菊のお浸しを頂き、このような文化が東北には残っているのだと感じ入ったものだ。

因みに「重陽の節句」とは、5つの節句の最後で、旧暦の九月九日がそれに当たる。「九」は、「陽」の数とされる奇数の最も大きな数で、これが重なることから「重陽」と称され、この日を「賀」の日として重陽の節句が設けられた。

参考までに、五節句とは、正月の七日（人日）、三月の三日（上巳）、五月五日（端午）、七月七日（七夕）と九月九日の重陽の節句である。1月7日は七草の節句で無病息災を願う。3月3日は桃の節句で女兒の健やかな成長を、5月5日は端午・菖蒲の節句で男児の健やかな成長を、7月7日は、星祭で、技巧の向上を願うものとされている。

中国では、この日に、野に出て宴を催し、「登高」と言って小高い山に登る風習があった。大災厄を避けるために、赤い袋に茱萸（シュユ）の木の実を入れて山に登り、菊酒を飲みなさいと言われ、その通りにしたところ災いを逃れる事が出来たという伝説が起源だそう。

漢詩に、杜甫の七言律詩「登高」がある。

「風急天高猿嘯哀	渚清沙白鳥飛廻
無邊落木蕭蕭下	不盡長江滾滾來
萬里悲愁常作客	百年多病獨登臺

艱難苦恨繁霜鬢 潦倒新停濁酒杯」(唐詩選卷五)という詩である。

重陽の日に親しい友もなく一人揚子江を望む台上に登って、放浪の身の侘しさを詠じたものだ。

江戸時代までは、五節句の最後を締めくくるものとして最も盛んだったとも言われ、衣替えの季節でもあり、作物の収穫が終わった時期と言うこともあり、収穫祭りとしての性格をも帯びるようになり、その代表的なものが「唐津くんち」や「長崎くんち」である。「くんち」即ち「九日」である。元々九月九日に行われたものである。

二十四節気や節句が本来持っている季節感と実際の時節がずれているのは可笑しいものだ。太陰暦に戻せば当然実生活は極めて不便である。良い解決策はないのか。

(参考：百科事典、各種 HP etc)